

6 野菜病害虫の発生動向

はじめに

近年、消費者からの要請による減農薬や、生産者自身の防除意欲の減退により様々な害虫が増加傾向にある。また、従来発生がなかった病害、まれにしか発生しなかった病害が発生している。それら主要な野菜病害虫の発生動向を解説する。

1 主要野菜の病害

レタスパーティシリウム萎凋病

レタスの下葉が黄化・萎凋し、髓部（クラウン部分）が褐変する症状が発生している（写真1）。主にトンネル栽培の作型（厳寒期）で発生する。原因究明の結果、日本で初めての「レタスパーティシリウム萎凋病」であることが明らかとなった。微小菌核、厚壁孢子、休眠菌糸が耐久体であり、土壌伝染する。太陽熱消毒の効果が期待できる。今後の拡大に注意が必要である。

レタスビッグベイン病

10年ほど前から発生している。昨年の台風による浸水の影響で、さらに発病面積が増加傾向で、発生は場率は南あわじ市で30%に達している。夏場の太陽熱消毒の防除効果が高い。現在、耐病性品種のロジックが普及しているが、さらに強い抵抗性品種の選抜が進行中である。また、内生細菌を用いた生物的防除の研究も進行中である。

レタスべと病

葉裏に足の長い白いカビを生じる。育苗段階から発生する。ここ数年、育苗床を中心に急激にまん延している。分生子の侵入には「ぬれ」が必要で、高湿度で発病が助長される。育苗ハウス中では換気（送風）を心がけ、湿度を下げるのが肝要である。

コマツナ白さび病

近年発生が増加している。病原菌は罹病残さ中で

生存し、伝染源となり、水滴とともに感染する。チンゲンサイなど他のアブラナ科中国野菜にも感染する。

その他野菜の病害

多犯性の菌核病がレタスを中心に増加傾向にある。本病は、菌核から発芽した子のう盤から飛散する子のう胞子によって感染する。

また、イチゴの作付品種（さちのか、章姫など）の変遷に伴い、イチゴ炭疽病が増加している。

2 主要野菜の害虫

ネキリムシ類（カブラヤガ、タマナヤガなど）

春から晩秋にかけて作物を問わず発生する。特に、これらの老齢幼虫に地際部をかじられると、作物が立ち枯れてしまい、被害が大きい。虫の密度の割に被害が大きいのが特徴である。

キスジノミハムシ

アブラナ科の大害虫であり、幼虫は根を、成虫は葉を食害する。施設の隙間から入り込むことが多い。コマツナなど軟弱野菜で発生が多い。

その他野菜の害虫

ダイコンサルハムシの発生が増加している。殺虫剤の使用がへっていることも原因の一つと考えられる。

ハスモンヨトウ、ハイマダラノメイガといった鱗翅目類も依然として多い。

今後の方針

今後は発生が問題となっている病害虫について、その発生要因を解析し、優先順位をつけて、要望・提案試験研究課題として取り組むなどして現場のニーズに対応していく。

神頭武嗣（農業技セ・病害虫防除部）